

中国の舞踊における現代性について

秋 葉 尋 子

舞 踊*

(2007年6月20日受理)

はじめに

シルクロードは、ロマンとしておきたかったが、時の流れを拒むことはできなかった。日中国交正常化30周年の波は、筆者にもやってきた。日本中国文化交流協会の「新疆曲芸鑑賞」訪中団でのシルクロードと舞踊のフィールド調査である。日本中国文化交流協会と中国曲芸家協会との長い交流の一環として行われたものである。新疆ウイグル自治区のウルムチ、イーニン、ナラティ、トルファン、カシュガル等を訪問し、説唱芸術の総称である曲芸や民族音楽、歌舞を研究した。舞踊が専門である筆者は、それらの中でも歌舞を中心に、日中の文化交流をし、フィールド調査をした。期日は、平成14年8月20日から9月1日まで13日間の行程であった。順を追って、歌舞について記述すると次のようになる。3日目の行程で、車でイーニンからセリム湖に行きカザフ族の少女達のパオでの心のこもった素朴な歌舞の場があった。踊ってほしいとの依頼で、筆者のソロとなった。訪中団やカザフ族の少女達との貴重な舞踊交流があり、パオのドアの間から見える真っ青な湖、天井から見える空と太陽の光を浴び、ゆったりとした時を感じながら筆者は踊り続けることができた。

この地に至るまでが強行軍であったが、カザフ族の少女達の後で筆者は踊ることで、疲労回復することができた。天候の晴れは、この地域で踊るための条件であった。なぜなら、セリム湖は、この地域で最も美しいと言われる湖であり、長い間、車に乗った後に忽然と現れる湖のエメラルド色の青さは晴れていなければ見ることができないからである。セリム湖は、地理的にはモンゴルに近く、馬が湖のほとりに多くいるモンゴルらしい風景であった。訪れる人は、イタリア人の観光客が最も多く、ヨーロッパと地続きであることが実感できた。カザフ族の動きの特徴は激しく、腕の動きをセーブしながら身体をダイナミックに動かしていた。プロとしてセリム湖でやれると言われ、カザフ族の舞踊のイメージを壊さないように筆者は踊り続け、素朴で幼い女性ダンサーに、共感できる血潮を感じた。

カザフ族については、セリム湖以外では、4日目のナラティ高原休暇村の夜の篝火祭りでカザフ族の歌舞の交流並びにダンスパフォーマンスをした。筆者は、民族的な扮装をし、篝火を背景に踊った。カザフ族のダンサーから、先頭を務めるように依頼され、リーダーとして楽しい動きの交流ができ、民族音楽の演奏をバックに踊り続けた。動きの傾向としては、エスニックな雰囲気終始した。夏でも寒暖の差が激しいところだったので、観客は真冬のようなジャケットを着用、ダンサーは薄衣であったが、篝火のおかげで寒さを感じることなくエンドレスに踊り続けた。夕日や満月が同時に見られる大草原の素晴らしい風景での舞踊は、長旅の疲れも吹き飛んで、忘れられない一夜の公演となった。

1、トルファンにおけるウイグル族の舞踊について

カザフ族の動きの特徴としては、例えば日本では童謡を歌いながら動く「かいぐり」という両方の手先をぐるぐると回しながらの手の仕草が多く見られ、向き合ってお互いに「かいぐり」の動きで交流し、暗がりの中

* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

でも動きながら心の交流がなされ、ダンサー（筆者）とダンサー（少女）が目と目で感じあうことができた。

カザフ族との歌舞の次の舞踊の機会は、砂漠のオアシスであるトルファンであり、ウイグル族の歌舞を鑑賞したり一緒に踊ったりして交流をした。トルファンの新しいホテルの野外ステージで、ウイグル族の歌舞が繰り広げられた。プロの歌舞団の公演であり、民族舞踊としてはなじみのある出し物が行われた。衣装もショーアップされており、本格的なトルファン歌舞団公演であった。最後のプログラムで筆者が踊ることになり、歌舞団のダンサーと舞踊をした。舞踊の場は、パオ、草原と続き、この地ではホテルの野外ステージとなった。男性ダンサーによって筆者は舞台に導かれ、男性ダンサーはペアの女性ダンサーと離れ、交代して筆者がその男性ダンサーとペアとなり、踊り続けた。

場面は転換し、男性だけの舞踊になり、動きはコザック風になった。この動きは、ギリシャやロシア、トルファン共通の動きであり、洋の東西を問わず、シルクロードの賜物の動きであるという感じがする。筆者も一緒にやってほしいとの依頼であったが、他の女性ダンサーの手前もあって遠慮した。歌舞団をくってしまったようであったが、筆者としては、思い切って踊ったので、爽快であった。筆者が20代の頃、体育史の国際会議出席後にヨーロッパを南から北まで1か月かけて巡った時に、ギリシャとロシアのコザック風のダンスが、地理的には縦長にもかかわらず共通項があることが不思議であった。シルクロードがその仲介をしていたということが、ウイグル族のコザック風の脚の動きによってより明解になった。さらにカザフ族やウイグル族の女性のゆるやかな腕の動きを実体験することによって、舞踊におけるシルクロードの役割が、いかに重要であったかということが、理解できた。

ウイグル族の歌舞は、葡萄の産地でもあり、第12回葡萄節で賑わうトルファン郊外の、葡萄構でも鑑賞した。プログラムは、トルファン市内の時とほとんど同じであったが、内容はレベルダウンしていた。ウイグル族の舞踊は、トルファンでは、市民権を得ていた。中国からの舞踊の留学生が、舞踊学院で学ぶ歌舞の丁碗舞もあり、頭上に載せるお茶碗やお皿を日本まで持ってきていながら、演ずるチャンスがなく、実際の食事のお椀になってしまったという、笑えない事実もある。民族舞踊を学んだ人なら、プログラムのいくつかはできるという類の舞踊だけに、技術の良し悪しが明確に出てくるので、舞踊団のレベルが判断されてしまうという怖さがある。トルファン市内の歌舞団団長は、パリダン女子で、主な演目は、女子集団舞：可憐の姑娘、双人舞：愛情、独舞：吾族白克舞、女子集団舞：丁碗舞であった。トルファンでの葡萄に取り囲まれた果樹園でも、異なった歌舞団が舞踊公演をしていた。トルファンでは、多くの舞踊家が職業として成り立っているということが、実感された時でもあった。果樹園で筆者は、アブドライム・カシュガル師範大学教授夫人と娘さんとともに、農民音楽家のアイリジャン、クワバンジャン、トソンジャンの演奏で独特のゆったりとした腕の動きで、舞踊の交流をすることができたことが貴重な体験であった。

2、敦煌の飛天におけるジェンダーフリーについて

シルクロードにおける舞踊に関するジェンダーフリーについて、把握し研究することが必要であると考え。一般的に、壁画の飛天や舞踊の傭などに特徴がみられる。敦煌の屈における壁画については、インドからやってきた、男性の飛天が際立っている。日本における飛天といえば、一般的には天女のことを思い浮かべるのだが、中国古代の飛天は、男性であった。日本において、天女に関する伝説は、一般的には海沿いの地方に残されていると思われる。日本から考える壁画の飛天のイメージは、女性であり、男性の飛天を想像することはほとんどないであろう。敦煌の壁画には、インドから伝えられたことが如実にわかる古代のインド人の男性が天空を飛んでいる。もちろん女性の美しい飛天もあるが、圧倒的に男性が多い。このことを、敦煌の研究員に確かめたところ、確かに男性のほうが多いとのことであった。日本の飛天は、美しい女性が舞い踊っているのだが、敦煌の飛天は、黒い容姿の男性が飛んでいる。その変節については、筆者は確たる資料を持っていないので、中国から日本に伝わってくる過程について、今後本格的に研究する必要がある。中国からなのか韓国経由なのかその経路に関する研究だけでも論文になってしまうくらいの筆者にとっては大きな課題である。

日本においては、天女という言葉でもわかるように、中国で男性と女性の両性にあったものが、主として女性の飛天が伝えられてきたということになる。敦煌の土産物のろうけつ染めののれんなどでは、日本の天女のような美女が飛天として描かれている。飛天は、中国において時代とともに変遷している可能性もある。

中国の菩薩信仰は、現在でも存在しているので、敦煌の壁画にみられる飛天は、中国というよりインドというイメージが強く、中国の現在や後に伝えられた日本の飛天を考えるに、インド人のような男性の飛天は、敦煌の壁画以外であまり見かけないということは、中国で男性から女性に変遷したということもありうる。敦煌の壁画に描かれている時代の中国の仏教の信仰は、強いものがあつた。その後、仏教が中国の人々から、東に移り、日本に伝えられて現在にいたるまで、チベット自治区等のような特殊なところを除いて、中国は、仏教国ですと強調できるかどうかについては、難しいものがある。かつて、そうであつたということではできるかもしれないが、現在そうであるとは、言いにくい。しかしながら、多くの仏教の建造物や壁画や仏像が世界遺産として中国国内に存在し、現代においても仏教は中国第一の信仰者数を持つ宗教であり、若い人々が熱心にお祈りしている姿を、各地でみた。仏陀はインド人であつたから、敦煌の壁画にインド人が描かれていても決して不思議でもなんでもないのであるが、あまりにも、時の経過があり日本ではインド人の飛天としてのイメージが湧いてこないのが実情である。敦煌の壁画の飛天を見て、改めて悠久の時を実感できた。まさしく壮大な思想の流れが感じられ、国や時代を超えて現代に伝えられ、現存することが、素晴らしいことである。仏教を伝えてくれた、強靱な思想や体力の持ち主に敬意を表したい。まさに奇跡としか言いようがなく、ラクダの死骸をのりこえて目的地につくというほど、死と直面しながらの砂漠の旅を経なければ、仏教が伝えられることはなかったからである。

一部分だけでも実際に砂漠を体験してみると、身を置くだけでも大変なところである。普通の人間では到底できないことである。日本は、緑が多く、水も豊富である。その中で暮らしている人が、たとえ旅とはいえ砂漠にいた時、早くそのような土地から脱出したいと思うのが通常である。漢詩で歌われている陽関のように、砂漠に本格的に踏み出すところから、生きては帰れないという覚悟をして、友と別れ出発しなければならなかったのである。そのような所に立った時に、命をかけて思想を守り伝えることの重さを、身にしみて感じ、その行為に感謝し、大切にしていかなければならないと自覚した。せめて、自身の専門である舞踊に関することを、探究し、人々にどのような影響を与えてきたかについて、明らかにしたいと考えた。どこまで解明できるか定かではないが、中国でのフィールド調査を基にして、できるだけの解明を試みたいと考える。

3、歌舞団におけるレパートリーについて

中国の主だった都市にある舞踊の歌舞団のレパートリーは、舞踊のみではない。そのことは、2回にわたる中国のフィールド調査によって実感された。まず、この研究の出発点は、日中文化交流協会による、中国曲芸家協会招聘の訪中団による体験であつた。最初は、舞踊と全く関係がないような訪中団と感じられたが、実際には、密接であつた。メンバーは、それぞれ専門は異なつていたので、舞踊に関しては、筆者が交流の主体となつて活動した。曲芸は、雑技ではなく、話芸である。日本でいえば落語や漫才などの寄席で展開される芸といつてもよい。それが、歌舞団とどういう関係があるのかといわれると答えに困る。筆者は、話芸の専門家ではないし、実際はどのように中国の人と接していくか悩んだものである。その種の分野については、日本であれば、寄席で行われている落語や吉本興業等で展開している漫才等に類することに類似しているといえよう。しかし、この「漫才」等についても、その根源は、中国であるというのが、真実なのである。そう考えると寄席等で行われているものについて、日本独自のものであると言うことが難しくなる。漢字にしても中国であり、それをアレンジした、ひらがなが日本のものである。着物にしても、呉服というように、中国の呉の国から出発したと考えられるものが、日本に渡り和服になつていったと考えられる。呉といえば、日本になじみのある三国志の三国のひとつである呉の国と考えられる。江戸時代の呉服屋という名称なども、その呉からきているのであろう。様々なことが、知れば知るほど中国に発信源があるということがわかる。

歌舞団のプログラムは、様々であるが、舞踊に関したものは、主だった都市の歌舞団でも、その地域の特徴を示すものだけとは限らない。例えば、モンゴルのダンスについては、女性の真っ赤なドレスを着て踊る情熱的な舞踊が特徴的である。この舞踊は、華やかな舞台を形成するだけでなく、モンゴルの支配が、世界で一番中国の国土を占めていた時代もあり、モンゴル以外の歌舞団でとりいれられていることがある。モンゴルの舞踊は、モンゴルだけで踊られているわけではない。モンゴルといっても、中国では、内モンゴルのことである。日本においては、内モンゴルでも外モンゴルでも、同じモンゴル族ととらえてしまうが、中国から見れば内モ

ンゴル自治区のみが、中国であると強調する。中国で少数民族であっても、他から見れば、中国の周辺国の民族である場合がある。なぜ、中国のどこに行っても、同じ民族舞踊が踊られているのであろうか。ひとつには、北京の民俗舞踊学院の授業プログラムに取り入れられているからと考えられる。そこで育成された舞踊家が、中国各地に散らばって、その地の舞台を彩っていると考えられる。中国では、歌舞団に就職すると給料をもらうことができる。企業に就職するのと同じ考えである。各地域での観光の重要な要素となっている。したがって、プログラムは、舞踊だけでなく、落語や日本流で言う漫才もあり、楽器の演奏も入っている。舞踊にしても、少数民族の特徴的な舞踊は、その土地の舞踊以外でもレパートリー次第で、演技可能である。曲芸の学校に舞踊の授業があるというのも、納得できる。中国の大学では、音楽の中に舞踊があるという例が多いので、舞踊と歌や楽器ができる。さらに曲芸の学校で才能のある人材育成をし、話芸は、楽器を弾きながら、あるいは、様々な舞踊の動きを伴いながら演技を展開するという多才な芸術として継承されている。

4、「蒼き狼」にみるモンゴルのグローバリゼーション

モンゴル帝国は、史上最大の国であった時代があった。一般的には、モンゴルといえば、「蒼き狼」で知られているが、映画となれば、最近では、2007年3月に公開されたものがある。2007年は、モンゴル建国80周年でもある。各所でモンゴルに関係した行事がなされ、日本はモンゴルフィーバーである。日本経済新聞での堺屋太一の連続小説は、様々な部族を詳細に書き、「テムジン」の時代をクローズアップさせている。武力はもちろんであるが、武力だけでなく、テムジンの考えかたもモンゴルが大きくなっていく因をなしている。自分の部族だけでなく、敵であった部族までも味方にし、国を大きくしていくやり方は、現在のアメリカに似ているとされている。移民を認め、あらゆる国の人々が生活しているアメリカでは、グローバル化によって、いろいろな問題が生じてはいるが、アメリカの発展には、移民の市民活動は欠かせないものであることは、自他ともに認められているところである。力によって支配する弱肉強食的なイメージも、アメリカとモンゴルに共通項があり、勝ち負けをはっきりさせるべく、武力による戦いも不可欠なことであった。戦争に次ぐ戦争であったことは事実であり、国が大きくなることに対する代償は、信じられないほど大変なものであったことであろう。

舞踊におけるグローバリゼーションも国の発展と同様のことがいえるであろう。シルクロードによって、舞踊文化も様々な東西の交流がなされてきた。中国における少数民族の舞踊の移動も、敦煌においてモンゴルの舞踊や音楽が、重要なプログラムになっているということは、モンゴルによって敦煌が征服されていたことがあるということである。プログラムの一部ではなく、少数民族の歌舞として大部分を占めていたことによって理解できる。中国の民族舞踊を考えると、モンゴルなしでは考えられないということであろう。

洋舞に於いて、バレエというよりも、モダンダンスについて考えるときに、グローバリゼーションは欠かせない事である。欧米のダンスカンパニーにおいて、様々な国の出身ダンサーによって組織されていることが特徴であるといっても過言ではない。その中でも、日本、中国、韓国を中心とするアジアの国々のダンサーは、繰り返し練習することをいとわないという点からも各カンパニーで重要な役割を果たしているといえよう。バレエにおいては、白人中心であるということはいまでもないが、性別役割も存在しているので、様々な制約のなかでダンスを展開しなければならないのが実態である。もちろん、それを逆手にとって、黒人や男性のみのバレエ団が生まれ、世界中で活動しているという事実があるが、それらのカンパニーが大勢ではないということも確かである。あくまでも例外的な存在であると考えられる。ただし個性的であり、何ものにも負けられない強さがある。

モンゴルの拡大は、中近東にまで及んでいるので、ヨーロッパにおける民族舞踊にまで影響があったと考えられる。舞踊に使用される音楽まで考えると、どこで区切ったら明解になるか難しいものがある。モダンダンスの作品がエスニックなものを志向することが、概してあるのは、決してモンゴルと無縁のものではないと考えられる。衣装にしても動きにしてもモンゴルが最大の国として君臨していたという事実とかけ離れて考えることは避けなければならないであろう。ギリシャとロシアの民俗舞踊の動きが共通していると感じられるのは、モンゴルが世界最大の領地を支配していたということと無縁ではないと言えるであろう。

5、三国志における劉備玄徳の教師としての特性について

中国の古代の出来事に興味を持ってみると、意外な面に気がつくものである。紀元前の三国志は、現代の生活でめまぐるしい時間を過ごしている人々にとっても、参考になることが多々存在している。一貫して平和を願ってこの世を去った劉備玄徳の母の願いのように、どこの国でも戦争に次ぐ戦争の中で、平和を願い続けている家族の存在は、非常に大きなものがある。「情」と「義」にあつい劉備玄徳の人としてのありかたは、理想の教師のありかたに似ている。諸葛孔明に軍師を依頼に行く時の「三顧の礼」にしても、自分より優れたものを持つ人に何かを依頼するにあたって、何度も相手がいいというまでねばり強く願い通い続けるというものである。一途な思いは、時代を越えて心を打つものである。

三国志は、NHKの人形劇で親しみをもって人々に紹介されている。2年間にわたって放映されたものがあるが、一週間ごとに放映されたものが、ケーブルテレビの時代劇チャンネルによって再びウィークデイの朝夕に毎日放映されるという機会があった。まとめて観る機会があり、人形劇ではあるが、改めて、劉備玄徳という人物とその仲間たちに感動を覚えた。そのヒットを受けて、時代劇チャンネルでは2007年秋に3度目のシリーズ放映を予定している。諸葛孔明に至っては、東北アジア体育史の国際会議に出席し、成都においてお墓まいりをした。紀元前2世紀の人物としての諸葛孔明が大切にまつられ、市民が親しめる公園や記念館になっている現在の姿をみて、成都のみならず中国にとっていかに重要な人物であったかということが納得できた。臨終の劉備玄徳に、諸葛孔明がいなかったら、蜀という国はなかったであろうと言わせるほど、三国志は、劉備玄徳というよりも、諸葛孔明の話ではないかと思わせる名軍師の姿がある。墓は、かなり大きな築山であり、周囲は一般の墓よりも、かなり大きなものである。しかし、諸葛孔明という人物が実際に存在していたということが確認でき、筆者にとっては、感激的な出来事であった。歴史上の人物が、実感として筆者に迫ってきた瞬間でもあった。初めて人形劇の三国志を見てから年月を経ているが、お墓参りをして実感として感じられるようになってから、再び放映されたものを観た。諸葛孔明が紀元前2世紀の人物とは思えず、現代に息づいているように感じられた。古代の人物の行為が、現代の人間形成に重要な生きるヒントを与えているというインパクトは大きい。3度目の放映も見逃すことなく、じっくりと人物研究をしようと考えている。

現在の教育において、舞踊は保健体育の教科専門として、現存する。舞踊教育の真のねらいは、創作舞踊により、人間形成することでもある。劉備玄徳は、歌舞音曲を教えていたということがあり横山光輝の三国志によって書かれているようである。劉備玄徳は人間ができた人物として代表的であるが、その人生が戦争の連続であったにもかかわらず、人としてのやさしさを感じさせるのは、文武両道であることによるところが大きかったということが言えよう。どのような状況になろうと、人間としての在り方を見つめることを忘れずに生き続けたということは、稀有なことである。どのように劉備玄徳が、歌舞音曲を教えたかについて、書くことができないのが残念であるが、時代的に戦いをやらざるを得ない状況におかれていたにもかかわらず、最後の最後まで自らの方から戦うことをしようとはしなかったということを考えるにつけ、平和な時代に生まれたなら、戦いよりも、歌舞音曲を専業としていたかも知れない。芸術的な中で、自身の能力を発揮する姿が玄徳らしい生き方であったのかもしれない。漢の流れをくむ人物として、望まれて漢中王となったのであるが、本人の望むところではなかったのであろう。そのことよりも、仲間である関羽と劉邦と最後まで一緒に生きたことに違いない。自分の利害よりも友を大切に、師や家族を大切に、特に親孝行であることは、当時の尊敬される武将の資質でもあった。もともとの素質に加えて、仲間たちとの交流や真剣なる打ち合いによって、人間形成されていく過程は、舞踊が目指すべきこととして重要であり、特に舞踊を創作していく過程で重要なことであることは、間違いのない真実であろう。一緒に創作していく上で、仲間たちといろいろ話し合い、葛藤や励ましあったりしながらひとつの舞踊作品を完成するという目的に向かって力を合わせて頑張っていくという姿こそ、現代の教育に不可欠なことである。その重要性を認識することこそ三国志の玄徳から学ぶ舞踊の姿勢として肝要なことであろう。

6、スーパーサーカスにみられる舞踊の動向について

我が国において、サーカスといえば「木下サーカス」と言ってもよいであろう。家族づれで楽しむサーカス

は、かつて娯楽のそう多くなかったわが国では、映画とともになくてはならない庶民の楽しみであった。しかし、サーカスの訓練は、団員の中で育てられ、演じられていて、一般にはほど遠い存在であった。サーカスは見についても、人々にはできるとは思わなかったし、サーカスの団員になるという手立ても一般的には考えられなかった。サーカスで生活している人でなければ育てられないものだと思われていた。ところが、最近では、日本ですら、サーカス学校なるものが、できてきたのである。オリンピックの体操選手が、地方で合宿して強化することはあるが、サーカスの学校が地方で特訓するという例は、なかったのではないだろうか。日本経済新聞にサーカス学校の記事がでていたが、今まであまり注目されていなかった村が、サーカス学校ができたということによって、活性化する兆しが出てきた。サーカス学校が村おこし、町おこしの役割を果たしているという例にもなっている。サーカス学校の先生は、ロシアから来ているので、我が国の指導者だけで、運営しているわけではない。生徒は日本人であり、日本にも、本格的にサーカスの技術を学び、サーカスの団員となって、活躍したいと希望する若者が増えてきたということでもある。

最近のヨーロッパのコンテンポラリーダンスの作品では、サーカスの技術が必要になってきた。日本のダンサーが、フランスのコレオグラファーの作品に出演するときは、活躍する場面が限られ不利になっていた。出演するとしてもあまり目立たなかった。どうしても、サーカスのような大きな空間を揺るがすような動きに、観客の目が向いてしまうのが、実情であった。フランスでは、サーカス学校というのは、珍しいものではない。サーカスやアクロバティックな動きを専門とする仕事一般の職業として成り立っているからである。それはもちろんダンスにも言うことができる傾向であり、一般の職業安定所でコンテンポラリーダンスの仕事を探ることができるほどである。このことは、日本と異なる点である。中国では、舞踊は職業として成り立っているため、雑技団を中国のサーカスの一部と考えれば、職業として十分なりたっていると考えられる。もちろん、雑技団は、日本においても職業として成り立っていた。ただし、中国の人で、温泉などの地方のショーなどに出演する場合のことである。この場合は、ホテルや旅館の仕事もやらされているので、雑技オンリーで職業として成り立っていない。かつて周首相が日本に来た時に、中国の民俗舞踊や雑技が、日本の各地でやられていることに驚き、中国本国でも本格的に保存し育成していかなければならないと決意し、民族舞踊の学校や雑技団の公演を発展させるよう尽力したとのことである。民族舞踊や雑技等の演技者は、文化大革命によって、本国ではやれなくなったので、日本にのがれて絶やさないう演技し続けていたのである。「二十過ぎればただの人」という言葉があるように、雑技団の団員は、20才前の青年や子供の集団であることには違いはないのだが、連日の公演にも耐える強靱で柔軟な身体と精神を持った職業であることには違いはない。二十過ぎると一般的に結婚できなくなるそうである。理由は身体が柔軟すぎて日常に支障をきたすということであるとされている。20才前に引退せざるを得ない理由は、それだけではなく、職業として成立するだけあって、携わる人の数が多く、早くから引退せざるを得ないという点では、中国の民族舞踊も実状は同じである。

7、「ドラリオン」と雑技団の「白鳥の湖」について

東京の代々木で巨大なテントを張って、スーパーショーを展開していたスーパーソレイユによる「ドラリオン」の2006年の作品は、東西の融合として、トランポリンによる体操や、雑技団のスーパー技によって成り立っていた。東洋のサーカスという中国の雑技というイメージがぴったりくるということであろう。中国で本場の雑技団の公演を見てきたものにとっては、ビッグサーカスほど派手ではないが、演技や技がはっきり見え、バラエティーに富んでいるのもかわらず、3千円程度で見ることができる。もちろん内外価格差があるが、日本の「ドラリオン」は、1万円はかかるので、我が国のスーパーショーは、一般の娯楽としては、割高と言えるだろう。全般的に日本のショーは高い。世界的には、サーカスのほうが見る側にとっても、やる側にとってもスーパーショーとしての市民権を得ているといえるであろう。トランポリンや体操、サーカスに対して、雑技のほうはやはり圧倒的に子供が多かった。一般の学校にはいけないだろうから、雑技団や特殊なサーカス学校などでなければ育成できないということはいままでもない。

いまや、雑技団は、中国のものというだけにはとどまらない。「ドラリオン」の国際性にみられるように、もはや、世界的なものである。雑技が雑技にとどまらないということに関しては、バレエの「白鳥の湖」が、広東雑技団によって公演されるということで、一般的な雑技団のプログラムを観ている人々にとっては度肝を

抜かれることであった。昨年の8月に公演され、大好評であった。その評判を受けて本年の2007年においても、同じ、8月に再演されるということになり、再びスーパー雑技が展開されるということになった。雑技が単に超人技を展開するだけではなく、芸術作品として好評を博す時代となったといえよう。男性の上腕や頭の上にトウシューズで立ち女性がアチチュード等のバランスをとるといった技術だけ見ても、驚きに値するのに、「白鳥の湖」全幕を展開するとは、数年前では考えられないことであった。雑技の技が、技におわることなく、芸術作品として成長し公演されるということは、素晴らしいことである。どこまで、雑技団がビッグになっていくのであろうか。想像するのも面白いことであり、期待されることである。

劇場空間も、単なるステージのある劇場にとどまらず、「ドラリオン」のようなビッグなテントを張り、ほぼ円形ともいえる劇場を造り、連日超満員の状況を作りだしている。日本全国を巡業したあと、好評により、東京の代々木のビッグサイトで再演された。大量の観客が、1万円を超えるチケットを買い求めて、楽しみにくる時代がきたようである。いくら払っても自分の楽しみのためにお金を使うことは、おしくはないという時代に突入し、サーカスや雑技、ダンスに音楽とジャンルを超えた芸術が花開いている。ただ、技を展開すればよい時代ではなく、より高い芸術性が求められているといえよう。劇場にくることによって、テレビではない生の人間による、驚きの連続を体験できることは、まさに、生きていることを、実感できるという点でも、価値の高いものであろう。すでに、単なる娯楽を超えて、異文化体験や、国際性を身につけながら、創造性も増し、見る人間にも右脳の活性化をするという効果もある。さらに、技の融合により、観客に「癒し」の効果も与えることが可能になるという点で、これからますますジャンルを超えた公演が展開されるに違いない。

8、映画スターにみられる舞踊について

日本映画が久々に活性化している。システムを変えて展開されてきているので、資金面でも心配がなくなり、良い作品を撮ろうという取り組みが本格的になってきた。良い作品を作ろうというファンด์をつくり、大手の映画会社では取り組めない作品等を制作する。映画に出演する俳優に舞踊関係者が比較的多いことは、中国においては知られるところである。我が国においては、まだまだ俳優が、ダンスや歌と芝居ができて才能のある人という意味のタレントであるというまでには至っていないが、映画の盛んな国では、ダンスが踊れるというのが能力のひとつでもある。中国においては、チャン・ツイイーのように、中国北京の舞踊学院から演劇学校に行き、中国を代表するスターになったということなどに代表されるように舞踊家の映画人としての活躍が目立っている。中国舞踊界は、舞踊人口が多く、舞踊のトップになるのは難しく限りある人数なので映画界に方向転換する人も多い。決して舞踊界でやっていけないというわけではないが、トップになれない人の方が多く群舞の一員になるしかない。その場合は、自らの道を自分の力で開拓しなければならない。コンクールで入賞圏内に入っているだけでもトップでなければ道がそれ以上開けない場合、映画スターという道も考えられる。チャン・ツイイーは、舞踊学院に在籍している時代には、同期の北京の舞踊界での評価によると、舞踊の実力は入賞圏内であったとはいえ平均的であったそうである。北京のどの舞踊学校にも彼女レベルのダンサーはたくさんいたということである。しかし、映画スターとしてのチャンは、顔こそ美人の極みというわけではないが、スタイル抜群でアクションでは舞踊の技術が最大限に生かされている。中国の映画界をリードする女性のトップリーダーであることには間違いない。

チャンのような例を欧米にしてみると、かの映画で有名なオードリー・ヘップバーンがいる。彼女は、最初バレリーナを目指していたが、やはり、トップになるまでには、30代を越えてしまうということがわかって、映画スターになろうと方向転換する。ダンスもバレエのみでなく、多くの人の目に留まるような場で踊ることをしながら、チャンスを待っていた。見出してくれる人がいたら、チャンスを逃さずひたすらスターの道歩んでいる。チャンも同様であり、みいだしてくれた映画監督のイーモウ氏によってチャンスが与えられ、スター街道をまっしぐらに進んでいった。オードリーもチャンもダンスによって鍛えられたしなやかな身体を持っていたが、単に美しい身体や顔のみでなく精神的にもトップになろうという負けじ魂の持ち主であった。

少し下火になったが、我が国の女性を中心にフィーバーしている韓流のスターの中にも、ダンスが目立った才能である人物がいる。韓国の場合は、男性のスターであるが、ピという若者である。そもそも韓国のスターは、俳優学校でしっかりと演技や舞踊の勉強をし、大学で演劇や舞踊の専門学部や学科を卒業した人が多いの

で、歌が歌えて、舞踊や芝居もできるというスターが一般的である。歌はもちろんであるが、舞踊のほうが他のスターよりも抜群というのが、ピである。韓国での人気にとどまらず日本に於いても、武道館での公演は満員盛況であり、なかなか顔や姿はもちろん、演技や舞踊の力もすべてそろっているスターはいない。演技は優秀であり、舞踊はほどほどというのが韓国一般的なスターであろう。

韓国は、舞踊自体が盛んであり、モダンダンスも盛んで群舞としての作品の価値も高いので、映画の世界に転身することなく舞踊をやり続けることができるということも背景にあるのかもしれない。大学にダンスの専門があり、ダンスカンパニーと直結していて、社会的にも認められているという国としては、アジアでは突出していると認められる。韓国も、アジアの舞踊界の中でゆるぎない実力を持ち、発展が期待される国である。

おわりに

中国の舞踊における現代性について考える上で、シルクロードについて知ることは重要である。中国の広い国土の歴史や地理を把握しなければ、民族舞踊をはじめとする中国の舞踊の現代性について理解することは困難である。中国の人々の生活にとって、舞踊は欠かせないものであることはいうまでもないが、北京のオリンピックを経た後において、1億総じて動きの世界に入っていくとのことである。現在のところ、あるいは今までのところ、舞踊にしてもスポーツにしても、特殊な専門家がやるものという状況を乗り越え、庶民のものとして市民権を得てくるとのことである。現在においても、街の公園や広場で、朝夕、太極拳等の運動をする人々と並んで舞踊を披露する人々もたまにみかける。歌舞音楽は、どこに行っても展開されている。中国の舞踊にとって、歌舞団の存在は大である。一貫した教育によって、各地の歌舞団の団員が養成され、その数は、日本の宝塚等とは比較にならないほど多くの舞踊家によって中国各地で展開されている。もちろん、給料も出ている。額については、地域で異なるが生活は保障されている。舞踊は立派な職業として成立している。ヨーロッパにみられるように、職業安定所に行って舞踊の働き先を見つけて働くという感覚と同様である。わざわざ日本から中国に行って、舞踊のプロとして活躍している人もいる。我が国では、稽古場で教えるということをしていない限り無理である。プロとしてやっていくことは、突出した数少ないカンパニーに所属して活躍するしか成り立たず、一般的とは言い難い。

中国の舞踊については、各地の観光が活発になればなるほど、発展していくことは間違いない。北京のオリンピックによって多くの観光客が集まり、数々の舞踊のショーが各地で展開され、多くの人が鑑賞することであろう。このことは、ホテルの建築等のジャンルの発展の比ではないのではなかろうか。舞踊に関する学校も、単に専門学校レベルではなく、現在においては、中国が教育に力を入れているという状況もあるが、大学の学部において本格的に舞踊を教育する方向にある。舞踊専門の大学も存在し、一説には、かつてはアジア圏では中国にひとつしかないと言われていた。舞踊の専門学校が大学としてグレードアップされてきているという背景もあり、大学において舞踊学部の設立を計画しているところも出てきている。音楽の学校や大学の音楽学部の一部ではなくなっているという傾向である。舞踊が舞踊として存在する意義が認められてきたとも言えよう。その傾向は、ミュージカルの世界にも言えるのではなかろうか。ミュージカルといえば音楽というイメージが先行するが、我が国や上海における劇団「四季」のように、舞踊を基盤として手堅くトレーニングをし、舞台上で演技や歌舞をしていくという傾向は、中国の舞踊が他ジャンルと複合し発展し続けていく可能性を示唆している。

引用・参考文献

- 1) 秋葉尋子；現代中国の舞踊について、東京学芸大学紀要 第5部門 第43集 pp、239-246、1991
- 2) 白須尋子；シルクロードとダンス、舞踊教育学研究 第5号、pp、39-41、2003

中国の舞踊における現代性について

秋 葉 尋 子

舞 踊

抄 録

中国の舞踊について、フィールド調査したものに基づいて、考えをまとめたものである。主として、新疆ウイグル自治区を中心として、シルクロードとの関連に留意しながら、舞踊とのかかわりを深く理解しようとする試みである。はじめに、1、トルファンにおけるウイグル族の舞踊について、2、敦煌の飛天におけるジェンダーフリーについて、3、舞踊団におけるレポーターについて、4、「蒼き狼」にみるモンゴルのグローバル化、5、三国志における劉備玄徳の教師としての特性について、6、スーパーサーカスにみられる舞踊の動向について、7、「ドラリオン」と雑技団の「白鳥の湖」について、8、映画スターにみられる舞踊について、おわりに、という論文構成になっている。全体的に、中国の舞踊の現代性についての考えを中心にしているが、他のジャンルや他の国とのかかわりも重要であり、現代の状況を判断するにあたり、かなりの比重を占めたのではないかと思われる。

映画・演劇はもちろんのことであるが、中国の曲芸や雑技にまで及ばなければ理解することは難しい。

現代の中国における舞踊を考える上で、複合的なイメージが不可欠である。民族舞踊については、観光におけるショーとして、中国を訪れる人々にとって親しまれている。中国の人々の踊る楽しみも欠かせない。トルファンにおける葡萄園で踊っている姿は、中国において舞踊が庶民の生活に欠かせないものであるということが理解できる。中国の雑技についても、現代におけるダイナミックなスーパーサーカスの目玉となるものである。また、曲芸については、日本における漫才等の紀元としての中国の文化である。さらに話芸については現代の中国の人々にとって大切な楽しみであると考えられ、曲芸の専門の学校における教育においても、舞踊の訓練は欠かせないものである。この傾向は、北京のオリンピックを経て、ますます庶民のものとして、あらゆるジャンルと複合しながら発展した舞踊の姿として定着していくことであろう。